

オーウェル
小説
コレクション 4

葉蘭をそよかせよ

ジョージ・オーウェル
高山誠太郎訳



晶文社

訳者について

高山誠太郎（たかやま・せいтарろう）

一九二六年東京生。五六年、早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了。現在、武蔵工業大学教授。

オーウェル・小説コレクション④

はな
葉蘭をそよがせよ

一九八四年三月一五日発行

著者 ジョージ・オーウェル

訳者 高山誠太郎

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

オーウェル・小説コレクション 4

葉蘭をそよがせよ

ジョージ・オーウェル 高山誠太郎訳

George Orwell.

KEEP THE ASPIDISTRA FLYING

First published in 1936

Japanese copyright © 1984

by Shobun-sha publisher, Tokyo.

ブックデザイン 平野甲賀

葉蘭をそよがせよ

時計が二時半を打った。マッケクニー書店の奥まった小さな帳場でゴードン——ゴードン・コムストックはコムストック家の末っ子で、としは二十九歳なのに、もうなんとなくうらぶれていた——は、テーブルにぐったりともたれかかりながら、四ペニーのプレイヤーズ・ウエイツのたばこの箱を親指で押し開けては閉じていた。

かーん、かーんという別の、もっと遠くの時計の音——通りの向う側のプリンス・オブ・ウェールズ(名前の)から——がよどんだ空気をふるわせた。ゴードンはよいしょと体を起こし、たばこの箱を内ポケットにしまい込んだ。彼はむしろに一服吸いたかった。だが四本しか残っていない。今日は水曜日なのに、金曜日まで文無しだ。今夜と明日まる一日、たばこなしではやりきれない。

明日、たばこなしで送る時間のことを考えると、今からもううんざりして、立ち上り、ドアの方へ歩いていった。小さくて弱々しく骨細で、動きにはいら立ちがあった。コートの右袖はすり切れ、真ん中のボタンがとれていた。既成品のフランネルのズボンにはシミがつき、よれよれだった。靴は上から見ただけでも、底を張り直さなければならぬのがわかった。

ズボンのポケットにある金が、立ち上る時に、ちりんと鳴った。正確にいつて合計いくらあるのか

彼は知っていた。五ペンス半——二ペンス半と三ペンス貨だ。ためらった後、みじめな三ペンス銀貨（「昔前の小さい銀貨で、実際に使われることは滅多に」をとり出して眺めた。いまいまいしい、役立たずめ！ それにしても、こんなものをつかませられるなんて、間抜けだなァ！ 昨日たばこを買いに行った時のことだった。「三ペンス銀貨ですけれどいいですね？」と店の女の子が陽気に言った。当然言われるままだった。「いや、けっこうです！」と言うしかなかった。ばか、大ばかめ！

五ペンス半しかなく、そのうち三ペンスは使えないのだと思うと、気がめいった。三ペンス銀貨で買物なんかできない。それは硬貨などではなく、判じ物の答えだ。手に一杯硬貨があって、三ペンス銀貨がまぎれこんでいるなら別だが、ポケットからとり出すなんて間抜けもいいところ。「いくら？」「三ペンス」と店の女が言う。それからポケットを探って、あのふざけた銀貨をつまみ出すと、それだけが指先に小円盤のようについついてる。店の女がくすりと笑う。この三ペンスしかないのね、と女にはピンとくる。女がそれをちらりと見るのがわかる——クリスマス・プディングがくつついているかしら、と思っているのだ。おれは悠然と店を出るが、もう二度と同じ店には行けない。だめだ！ 三ペンス銀貨は使えない。二ペンス半だけしかない——二ペンス半で金曜日までもたせなければならぬ。

ちょうど、昼食後の人通りのない時刻で、お客は来そうにもなかった。彼と七千冊の本だけだった。帳場に通じる狭くて暗い屋内は、埃と朽ちた紙の匂いが漂い、天井まで本がつまり、大半が古びた売れない本ばかりだった。天井に近い上の棚には、絶版になった四つ折りの百科辞典が横積みになれ、共同墓地に積み重なった棺のようだった。隣室の戸口に使われている埃まみれのカーテンを、ゴード

ンはわきに押した。こちらは照明がよく、貸本が入っていた。「二ペンス、保証金なし」の本で、本泥棒の穴場だった。もちろん小説だけだった。何たる小説！でもそれは当然のことだった。

八百冊以上の小説が部屋の三方に天井まで並び、派手な長方形の背中が何列も列をつくり、壁は色とりどりの煉瓦を縦にはめ込んだように見えた。本はアルファベット順に並べてあった。アーレン、パロウズ、デーピング、デル、フランコウ、ゴールズワージー、ギブズ、ブリーストリー、サパア、ウォルポール。ゴードンは無然と本を眺めた。今はどの本もいや、とりわけ小説がいやだった。あのふやけて半分日焼けしたがらくたが、ひと所にぎっしりつまっているのがたまらなくいやだった。プディング、スエットプディングだ。プディングの厚切りが八百も、壁となっておれを閉じこめる——プディングの石穴倉に。こう考えると息苦しかった。彼は開いた戸口を通って店先へと歩いていった。歩きながら髪をなでつけた。癖だった。ガラス戸の外には女性がいるかも知れない。ゴードンの風采は上らなかつた。身長は五フィート七インチしかなく、髪の毛が長すぎるため、体にくらべ顔がやや大きく見えた。小柄な体を全く意識しない時はなかつた。だれかに見られているな、と思うとしやんと背すじをのばし、胸を張り、時には単純な人たちを欺いた。

しかし外にはだれもいなかった。店先はほかの所とちがい、小ざっぱりとして、金をかけているように見え、ショーウィンドーの本とは別に二千冊ほどが置いてあった。右手にはガラスのショーケースがあり、児童書が収めてあった。ゴードンはくだらないラックハメスクの表紙から目をそらせた。ウェンディリーを旅して、つりがね水仙の咲く森の空地を行く、いたずら小僧を描いたものだった。ゴードンはガラス戸越しに外を見た。天気はわるく、風が立ちはじめていた。空は鉛色で、通りの敷

石は泥だらけだった。十一月三十日、聖アンドルーの日だった。マッケクニーは角店で、四つ辻は広場になっていた。ドアから左手の、視界にやっと収まるところに、楡の木があるが、今は葉がなく、大きな梢が空にセピア色のレース模様を織っていた。右手、プリンス・オブ・ウェールズの隣には、高い広告掲示板があり、新案の食料品、薬品の広告で埋っていた。大きな美人の顔、顔、顔——底抜けの樂觀主義にあふれた、白痴のピンクの顔。Q・T・ソース、トルウィート朝食クリスプス（お子さんは朝食クリスプスで大騒ぎ）、カンガルー・ブルゴーニュ、ヴィタモルト・チョコレート、ボヴェックス。とりわけボヴェックスの広告がゴードンには一番気になった。めがねをかけ、てかてかの黒い髪のねずみ顔の事務員が、カフェのテーブルに坐り、ボヴェックスの白い茶碗を前に笑っていた。「コーナー・テーブルはボヴェックスで食事を楽しんでいる」と宣伝文句はうたっていた（コーナー・テーブルとは部屋のコーナーに設置する三角テーブル。同じ大きさの垂板がつき、揺げると方形のテーブルになる。ここではコーナー・テーブルに坐っている人を指している）。

ゴードンは目の焦点をちぢめた。埃でくもった窓ガラスから、彼の顔が見返していた。ろくな顔じゃない。三十前なのに、たそがれている。血色がわるく、消しようもなくはっきりしわがある。額は広く——いわゆる良い額だが——あごはとんがり、顔全体が卵形よりは西洋なし形だった。ねずみ色の髪は乱れ、愛想のない口、緑がかったはしばみ色の目。また焦点をのぼした。このごろでは鏡を見るのがいやだった。外はすべてが暗く寒々としていた。電車が鋼鉄製の耳ざわりな白鳥のように、敷石の上をがなり立てすべってゆき、風にあおられた落葉のくずがその後には舞った。楡の梢がゆれて東にねじれた。Q・T・ソースのポスターは端が千切れ、リボン状の紙がちっぽけな旗のように、気まぐれにはためいた。右手の横丁でも、裸のポプラ並木が風に吹かれ、はげしくおじぎした。いやな冷

え冷える風。吹きわたるとき、おどしの調子があり、冬の怒りの最初の唸り声だ。詩の二行がゴードンの胸に生れかけた。

鋭くなにやらの風——たとえば、おどしの風？ いや、より正しくは脅迫の風。脅迫の風吹きわたる——いや吹き荒れる、か。

なにやらのポプラ——しなやかなポプラ？ いや、より正しくは、おじぎするポプラ。「おじぎする」と「脅迫の」とでは響きもいいのか？ 問題なし。おじぎするポプラ、裸木に、よし。

鋭く脅迫の風 吹き荒れ

おじぎするポプラ、裸木に

よし。「裸」は韻には下品だが、旋律があり、チャーサー以後の詩人はだれも旋律に合う韻をもとめてきた。しかしその衝動もゴードンの心の中でしぼんだ。彼はポケットの中で金をひっくり返した。二ペンス半と三ペンス銀貨——二ペンス半。彼の気分が退屈でねばりついた。韻や形容詞を考えるのに耐えられなかった。ポケットに二ペンス半しかない時は耐えられないものだ。

目はひとりでにまた向う側のポスターに焦点を合わせた。ポスターを嫌う個人的理由が彼にはあった。機械的に彼は広告文を読み返した。「カンガルー・ブルゴーニュ——英国人向きのワイン」「喘息が彼女ののどをつまらせる」「Q・T・ソースで旦那さんにもここに」「ヴィタモルト一杯で一日ハイキング！」「カーブ・カット——戸外の男たちのたばこ」「お子さんは朝食クリスプスで大騒ぎ」「コ

「ナー・テーブルはボヴェックスで食事を楽しんでいる」

「や！ お客——かな、ともかく。ゴードンは緊張した。ドアのそばにいと、店先のウィンドーから、こちらは見られずにはすかいに外が見られる。彼は入ってきそうな客を眺めた。

品のよい中年の男が、黒のスーツにボウラーハット、傘に書類かばんをさげ——地方の弁護士か市役所の職員といったところだが——大きな薄色の目でウィンドーをのぞいていた。ばつがわるそうだった。ゴードンは視線を辿った。そうか、そういうわけか！ 片隅のD・H・ローレンスの初版本をかざあてたのか。ちょっとしたエロを求めてだ、もちろん。チャタレー夫人のことをよそで聞いたのだ。いやな顔だ、とゴードンは思った。青白く、重苦しく抜け目のない、いやな輪郭。顔つきからするとウェールズ人だな——非国教徒だろう、いずれ。唇の両わきは非国教徒におきまりのたるみがあった。国もとでは地方匡正会か海浜純潔会の会長（ゴム底の軽い靴と懷中電燈で、海浜を歩いて、キスしている二人連れを照し出す）、ところがいまや都会に來ると豹変。ゴードンは彼が入ってくるのを願った。『恋する女たち』を一部売りつけよう。どれほどがっかりすることか！

「いや、だめだ！ あのウェールズの弁護士はおじけづいたのだ。傘を小脇にかかえ、背中を向けて行ってしまった。しかしきつと今夜、暗くなつてばつの悪さが消えれば、セックス・ショップにこっそり入り、サディ・ブラッキーズの『バリ修道院の浮かれ騒ぎ』を買うことだろう。

ゴードンはドアを離れて、書棚の方にもどった。文庫から出て左手の棚には、新刊と準新刊が置いてあり——派手な色が群がって、ガラス戸越しに見る人の目をとらえるようにしてあった。すべすべした汚れない背が棚から熱っぽい目を送っているようだった。「買ってよ、買って！」と言ってい

るようだった。出版したての小説——けがれない花嫁がペーパーナイフで切り開かれるのを待ちこがれている——と評論書が、若い未亡人のように、もう生娘ではないが、花開いており、そこかしこに六冊ばかりがひとまとめに、どことなく哀れなオールドミスを思わせる「ぞつき本」が、長い間保つてきた処女を、望みをすてずに守っている。ゴードンはぞつき本から目をそらせた。いやなことを思い出したのだ。二年前ちやちやな本を自費出版したが、百五十三冊しか売れず、あとは「ぞつき本」になってしまったが、「ぞつき本」としても売れなかった。彼は新刊本のそばを通り、それとは直角に並んだ、古本がもつと沢山入れている書棚の前で立ち止った。

右手はずっと詩の棚になっていた。正面は散文で種々雑多なものがどつきりあった。上下に区別され、きれいで高価なものは目の高さに、安くて薄汚れたものは、最上段と下段だった。本屋ではどこも、適者生存の争いがきびしく、活躍中の人の本は目線に集り、物故した人の本は上か下におかれた——ゲヘナに落ちるか王座に上るかだが、目立つ所からはずされることには変りはない。足元の棚には、ウィクトリア時代のすたれた怪物どもである「古典」がひっそり朽ちていた。スコット、カーライル、メレデス、ラスキン、ペイター、ステイブンソン——分厚いがみすばらしい背の題名もほとんど読みとれない。ほとんど人目につかぬ棚の上段には、公爵たちのずんぐりした自伝が眠っていた。その下の手の届く所には、まだ売れそうな「宗教」ものがおかれていた——あらゆる宗派、あらゆる教義のものが、雑然とひとかたまりになっていた。『精霊の手が私にふれた』の著者による『あの世』、フラー司祭長の『キリストの生涯——イエスは最初の社会奉仕者』。ヒレア・チェストナット神父のローマ・カソリック伝道の近刊本。宗教ものはセンチなものでさえあればいつも売れる。その下、

目の高さに、現代のものが並んでいた。プリーストリーの最近作。再版された「中間もの」のしゃれた小冊子。ハーバートやノックスやミルンの愉快な「ユーモア」。インテリ向きのヘミングウェイやバージニア・ウルフの小説が一、二冊。ストラチャーばりに読み易く書いた自伝。とんとん拍子にイートンからケンブリッジ、ケンブリッジから文芸評論に入りこんだ金持連中による、きざに澄ました本。冴えぬ目で、彼は書物の壁を見た。古いものも新しいものも、高級なものも低級なものも、思い上ったものも派手なものも、どれもこれも憎らしかった。見ただけで自分の才能のなさを意識した。

「作家」であると思ひこんではいるが、「書く」こともできない男がここにいる！ 単に出版されないという問題ではなく、何も、ほとんど何も創り出せないのだ。棚に雑然とつまっているものはどれもくだらないものだとしても、ともかくも実在し、活字になっている。デルやディーピングのような作家も、年間に大量のものを活字にしている、少なくとも。しかし彼が一番きらったのは、きざな「教養たっぷりの」本だった。評論や純文学の本だ。ケンブリッジ出の金持の若い連中がほとんど眠りながら書いたようなものだ——ゴードンももう少し金があれば書けたかもしれないのだ。金あつての文化か！ 英国のような国では、金なしでは文化人になれないのは、金なしでは乗馬クラブに入れないのと同じだ。子供がぐらぐらする歯を動かしまわすのと同じ本能で、彼はきざな装いの本——『イタリアのパロックの諸相』をとり出して開け、一節読んで、嫌悪と妬みの入り交った気持で、もとに戻した。あのものすごい博識！ あの病的な角ぶちめがねのお上品！ そしてこうしたお上品が暗示する金！ 結局その背後に何がある、金以外に？ まともな教育を受けるための金、有力な友人をつくるためにも金、暇と平安のためにも金、イタリア旅行にも金。金が本を書き、金が本を売る。正義な

んかいりません、神よ、お金をください、金だけでいいのです。

彼はポケットの硬貨をならした。やがて三十歳だというのに、なにひとつ成しとげていない。みすばらしい詩集が一冊あるだけで、それも全く薄っぺらなもの。以来まる二年、一冊のひどい本に取りこんできたが、にっちもさっちもゆかなくなり、頭の冴えた時には自分でもわかつている通り、もうだめなのだ。金がないため、ただ金がないために、書く力をうばわれている。彼は信条のようにその考えにしがみついていた。金、金、万事が金だ！ 元気づける金があれば、三文小説すら書けなからう。よい思いつき、精力、機智、文体、魅力——すべては現ナマで手に入れなければならぬ。

とはいえ、本棚を見ていると、少し気が楽になった。おびただしい数の本が色あせ、読まれなくなっている。結局同じ運命をたどるのだ。「汝、やがて死すべき運命にあることを記憶せよ」さみやぼく、ケンブリッジ出のきざな青年たちにも、等しく忘却が待ちかまえている——だがケンブリッジ出のきざな青年たちには忘却の訪れもおそいことはたしかだ。彼は足もとの、時に鈍らされた「古典」に目をやった。死んでいる、どれもみな死んでいる。カーライルもラスキンもメレデスもステイブソンも——みな死んでいる。神が朽ち果てさせ給うたのだ。彼はそれらの色あせた題名を見渡した。『ロバート・ルイス・ステイブソン書簡集』ほほう！ よしよし。『ロバート・ルイス・ステイブソン書簡集』か！ 本のとっぺんは埃で黒ずんでいた。汝は埃、埃にもどれ、ゴードンはステイブソンのにかわで固めたもめん麻布の背中をけとばした。古き偽金ありや？ ステイブソンが死骸ならば、お前も死骸。

ぼーん！ 店のベルが鳴った。ゴードンはふり向いた。客が二人、貸本の方に。元氣のない丸肩の